一般社団法人大阪知的障害者福祉協会機関紙

"try""angle" に「挑戦する視点」の意味を込め、3つの頂点に「当事者・家族・支援員」「施設・行政・地域」「過去・今・未来」などの多様な視点を重ねて、点から線、線から面に広げる支援への思いを込めています。

Vol. 159

2021 夏・秋号

トライアングル

TRY ANGLE

発行日／令和３（2021）年９月　発行／一般社団法人 大阪知的障害者福祉協会　発行責任者／松上利男　編集／松嶋桂子
〒542-0012 大阪市中央区谷町７丁目４番15号　大阪府社会福祉会館内
TEL 06-6763-3785　FAX 06-6763-3759　E-mail osaka-chifukukyo@giga.ocn.ne.jp

新型コロナウイルスの感染拡大が続いており、まだまだその収束の方向が見えません。皆様のご苦労はいかばかりかと思います。このような状況の中、今号のトライアングルでは「コロナ禍での対応の工夫」について取り上げることにしました。はじめのページでは、「コロナ禍であっても利用者様にとっての楽しみな取り組み」を紹介します。次のページでは「コロナ禍の中で福祉の現場の思いを聞く形でのインタビュー」から「ＢＣＰを通して感じたこと」をまとめてみました。皆様の参考になれば幸いです。

社会福祉法人障友会　くるみの樹

イタリア満喫カーニバル！

新型コロナウイルスの影響で、外出行事が軒並み中止となる中、利用者の皆さんから、外に行って美味しいものが食べたい等の行事に対するご要望が沢山挙がっていました。その中で、出来るだけ感染のリスクを減らしながら、利用者の皆さんのご要望を形に出来ないかと考え、一般社団法人大阪知的障害児者生活サポート協会様のエンジョイ支部助成金を活用し、ピザ窯を積んだキッチンカーに事業所まで出張してもらう事にしました。

当日は、事業所内と、駐車場にタープテントを張りオープンテラスも設置し、座席が密にならない様にしました。また、ピザやジェラートは味を選択出来る為、写真入りのチケットを作り、視覚的な判り易さと注文時の感染防止にも対応出来る様に配慮を行いました。ご自身で注文された、焼き立てのピザや濃厚なジェラートを、笑顔で頬張る姿がとても印象的でした。コロナ禍で外出が出来なくても、いつも通っている事業所で、イタリアを満喫出来た Buono ～！！な一日になりました。（掲載写真は緊急事態宣言前に撮影いたしました）

社会福祉法人日本ヘレンケラー財団　太平

スイーツ三昧！

「外出自粛なら来てもらおう！」ということで、6月4日クレープ・スイーツ専門のキッチンカーに来ていただきました！

お世話になったのは『Sweets Hero』さん。当日天気は生憎の雨模様でしたが、可愛い Volkswagen の車で来所され、ご利用者も職員も開始前からテンションＭＡＸ！ 音楽も流して下さり、キッチンカーの周りには、おしゃれで楽しい雰囲気と甘～い香りが漂っていました♪

メインのクレープは何と 28 種類！ 悩みに悩んで皆さん注文されましたが、人気ナンバーワンは『バナナチョコクリーム』でした！皆さん、甘いもの好きです♪

手作りのチケットと交換でクレープとアイスコーヒーを購入され、いつもと違った雰囲気の中、楽しそうに過ごされているご利用者を見て、職員も幸せな気持ちになりました。

また来てね～～～♪

イタリア満喫カーニバル！／スイーツ三昧！……1
コロナ禍における福祉現場の思いを聞いて！
～ＢＣＰを通して感じたこと～ ……2
感謝状を贈呈致しました……4
笑顔あふれる支援の場を創造しよう
～小冊子作成に込めた想い～ ……4
●ちょっとつぶやきリレー●
三恵園　平川 美規子 ……4

コロナ禍における福祉現場の思いを聞いて！～ＢＣＰを通して感じたこと～

近年、地震や津波、台風などの様々な自然災害に備えて、ＢＣＰ（事業継続計画）の作成が重要視されています。各事業所においては、自然災害などの緊急事態が発生した場合、事業の損害を最小限に抑え、事業の継続や復旧を図るためにＢＣＰを作成されているかと思います。未だ感染者数に歯止めが効かない新型コロナウイルス感染症においても、自然災害発生時と同様に、組織で取り組むための指針が必要だと感じています。

前号に引き続き、社会福祉法人産経新聞厚生文化事業団事務局長の木村勝也氏にお話を伺い、「社会福祉施設におけるＢＣＰ作成時のポイントと課題」「ＢＣＰを通して感じたこと」に着目してインタビューを行いました。

法人全体で共有できるＢＣＰの作成

クラスターが起きたことを想定した場合、法人としてどのように対応していくのか、組織の体制を見直す必要があります。事業が継続できるように、本部統括や現場統括といった役割を明確にして、組織全体が連携するシステム作りの大切さを感じました。

また、クラスターが発生してからＢＣＰが発動するまでに必要な初動対応が、どの職員も適切に行うことができるように、役割を決めておくことも重要です。

ＢＣＰはあくまでも基本計画

自然災害や感染症発生時に、事業継続のための準備や検討すべきことや、発生時の対応などを反映し、サービスを中断させない目的で作成するＢＣＰですが、クラスター発生時には想定していた対応がほとんどできなかったようです。木村氏は「ＢＣＰはあくまでも基本計画であって、有事の際への覚書。混乱した状況の中で適切に対応できるように、職員が安心できる仕組みも考えておかないといけない」と話されていました。

見通しが立たない状況への対応

備蓄品の準備や勤務体制の調整、環境変化に柔軟に対応しなければならない状況が続く中、対応基準の指針として『いつ』『誰が』『どのように対応していくのか』という組織作りの手引書だと思います。

関係機関のリスト化

行政をはじめ、施設内に入る委託業者やごみ回収業者にすぐに連絡ができるよう、連絡先のリスト化が必要とのことでした。特にごみ回収については、コロナ感染者から出たごみを処理する際に、すぐに回収業者に連絡できるように配慮されていました。

マニュアル通りの対応ができない

木村氏は「施設内で感染者が出ると、想定外のことが起こりマニュアル通りに対応することができなかった」と話されており、保健所からの指示に基づきながら、マニュアル以外の指示で対応されることが多かったようです。

そのような状況下で苦労されたことは、「ゾーニングに伴う利用者への対応だった」と伺いました。感染拡大が進むなか、最初に定めたゾーニングに問題が生じると、状況に応じてゾーニングを変更せざるをえないとのことでした。ゾーニングの変更に伴い、利用者を誘導することになるのですが、こだわり行動などの障がい特性により、暴れられたり大声を出されたりする方がおられ、利用者の対応に苦労されたようです。

職員派遣について

施設内の職員に感染者が出た際には、「他部署の職員に協力を得ながら対応した」と伺いました。しかし、協力業務を終えてからＰＣＲ検査を行ない、その後２週間は自宅待機をすることになり、法人にとって負担が大きかったようです。

また、法人内の職員だけでは現場の対応が難しくなった為、応援職員スキームを利用されたとのことでした。派遣された職員は、グリーンゾーン

での業務に限定されていたとのことでしたが、木村氏は「現場に入る職員が一人でも多く増えたことは、大変助かった」と話されていました。しかし、この職員派遣スキームは自治体に申請することになっており、申請するまでの手順が非常に手間取るものであったようで、職員派遣スキーム運用後のヒアリングや見直し、それに基づく改善運用が必要と思いました。

このように外部から職員の応援を受けることになると、「感染するのではないか」という不安が出てくるので、木村氏によると「受け入れる側にとって判断が難しい。感染症対策を福祉だけの問題では無く、医療と一緒に考えなければならない」とのことでした。

インタビューを終えて

今回の取材を終えて感じたことは、クラスターが起こる前の段階で準備を進めていても、想定外のことが起こり、戸惑う状況に直面する可能性があることです。たとえ、マニュアル通りの対応ができない状況になっても、職員一人ひとりが落ち着いて対応できるように、組織全体で取り組むシステム作りの重要性を感じました。

また、福祉と医療との連携を密にする制度作りが急務だと感じています。クラスターが起きた施設では、療養施設として対応しなくてはならない現状です。クラスターが起こらなかったとしても、施設内で新型コロナウイルス感染症が発症した場合、通院を必要とされる利用者が医療機関に受診できないのではと危惧しています。

現在の応援職員スキームにおいては、福祉職員が派遣されることになっています。しかし、職員派遣に協力してくれる方がおられても、受け入れる施設にとっては、感染リスクという精神的負担がのしかかる現状です。私たちは感染予防策を講じながら施設運営に取り組むことはできますが、医療従事者ではありません。命の危機に晒される新型コロナウイルス感染症について、福祉だけの問題として捉えるのではなく、すぐに医療従事者が介入できるシステム作りが必要であり、職員派遣の課題と並行して考えなければなりません。

私たちには利用者の生活を守るという使命があり、終息の兆しが見えない未曾有の感染症に対して、いつまで続くかわからない不安と向き合いながら、日々の利用者支援に務めています。コロナ禍における福祉現場の実情を知って頂く為にも、国や自治体に発信することが重要だと感じています。善意に頼る共助の形ではなく、公助のシステムが必要であり、国や自治体を交えたシステム作りの必要性を感じたインタビューとなりました。

編集委員：松嶋 桂子（委員長）、溝口遥、吉岡 裕幸、吉村 周一

開 催 日：令和3年8月12日

感謝状を贈呈致しました

令和3年2月に、（株）コンシェルジュ様より防護ガウン5000枚を協会に提供いただきました。また提供に際し、仲介をしていただいた一般社団法人福祉防災コミュニティ協会様と防災企業連合関西そなえ隊様には資金集めのためのクラウドファンディングも立ち上げていただきました。

ならびにジェイアイシーウエスト（株）様からもマスク5000枚を寄贈いただきました。

これに、感謝の意を表して、8月27日に感謝状の贈呈を行いました。改めて皆様方には深く感謝申し上げます。

大阪知的障害者福祉協会
事務局長　中川 博

笑顔あふれる支援の場を創造しよう
～小冊子作成に込めた想い～

前年度に作成した2枚のポスター。

『利用者さんの声、聴けてる？』

『職員同士、話せてる？』

月日が流れれば、いつしか見慣れた風景になっていたりします。ポスターが意図したことをさらに実践できるツールがあれば…。支援の場でふと立ち止まり、振り返る機会が必要では…。支援の場には良い支援が埋もれているのでは…。

権利擁護委員会が編集を担当させていただいた小冊子「良い支援しよう」が令和3年6月に発行されました。各委員が取り組んできた事業所での実践をベースに、支援の現場でもっと素敵な支援をしたいという思いを託しています。小冊子P．5とP．17にはポスターに込めた思いもお伝えしたく載せました。

小冊子は新たに知的障害者児の事業所に勤められた人を対象に作成しています。戸惑いやアレって思うことについて、同僚や先輩、上位職者とコミュニケーションを図りながらの気づきを促し、良い支援の担い手に成長していただきたい。そして、経験のある皆さんも小冊子をツールとして自らの支援を振り返り、素敵な支援者であり続けてほしいと願っています。

私たちの支援にはゴールがありません。日々の支援の振り返りを行うことがより良い支援力につながると信じています。その振り返りの一助に、そして自らの思いや考えたこと等をメモしながら、たくさんの書き込みで埋まった時、素敵な支援者である証しと誇りである唯一の『お守り』が完成します。

本冊子、作成にあたってハンドレッドラボの百瀬さんからクリエイティブな助言をいただいたことを申し添えるとともに、感謝申し上げます。

権利擁護委員会委員長　油谷 佳典

ちょっとつぶやき…リレー

三恵園　看護師　平川 美規子

私は三恵園で看護師として勤務し7年目となります。以前は病院や老健で勤務していましたが、障害者支援施設での看護は初めてで戸惑う事もありました。三恵園の利用者は何かしらの支援を必要としています。ここで感染症が発生すると、施設全体へ拡がる可能性があります。マスクはすぐに外し口の中に入れてしまう方もいます。手洗い・消毒も介助が必要です。物品類も鍵付きの所で管理しないといけません。

そんな環境でも、職員が一丸となり手洗いや消毒・清掃を徹底したおかげで、毎年罹っていたインフルエンザには一人も罹患する事なく、また風邪をひく人もいませんでした。『利用者様を守る・自身も守る』という気持ちを持ち、正しい情報・知識を身につけ実践する。一人一人の意識の向上が自然と感染防止に繋がっていました。

今後も職員一同、手洗い・消毒と清掃を継続し利用者様が安全に安心して生活していける環境作りに努力していきたいと思っています。

次回は
てらサポート
センターの
杉田 勇次さんに
お願いします